

【探訪】灘三ヶ町村の痕跡を巡る。

まちを歩いていると出会う石碑や地蔵はまちの歴史を伝えるタイムカプセル。
 なだだ編集委員が灘三ヶ町村のめぐるめく物語に耳をすませながら歩いてみました。

西灘村の境界線を歩く



今では数少なくなった西灘村の痕跡を探すために、岩屋から摩耶山の麓まで西灘村と神戸市の境界線(だったと思われる道)を歩いた。まずは岩屋にある臨港線跡。今は遊歩道となっているその場所に庄境架道橋という名前の橋がある。いかにも庄(町)の境であることをうかがわせる名前だ。そのまま北上すると JR 神戸線の線路がある。その下をくぐるトンネルも立派な境界線だ。トンネルを挟んで西側が中央区割塚通、東が灘区岩屋北町である。

トンネルを抜け原田線を越えると神戸文学館。言わずと知れた関西学院発祥の地である。敷地の中に神戸市界(原文ママ)と刻まれた石碑がある。これが唯一と言っている当時モノだ。碑の側にある大きな木は、この地の変遷を見つめてきた生き証人なのかもしれない。さらに北へかつての王子神社の堀に沿って歩く。学校や住宅が立ち並ぶ中を通り抜け、道はやがて青谷川沿の登山道へとぶつかる。ここまでおよそ30分。西灘村の残り香をかすかに感じる境界線ウォークだった。



庄境架道橋



神戸市界の碑

西郷町の太郎八地蔵尊



西国浜街道沿い、都賀川の西に太郎八地蔵尊という石碑の奥にお地蔵様がまつられている。この地蔵尊は、明和5年(1765)7月16日の台風で、都賀川の上流から流れてきた地蔵を、大石ノ太郎八という人が拾い上げたので、その名がついたと伝えられている。また、流れ来たこの日を命日と定め、地蔵盆を行うようになったため、通常の地蔵盆よりも1ヶ月早く行われる。

中央の太郎八地蔵を囲む18体の地蔵は、地域で亡くなった子どもたちの供養に一体ずつ増えていったものらしい。

かつて太郎八地蔵は「しりひねり地蔵」とも「つねり地蔵」とも呼ばれ、地蔵盆の日に限り、前を通る女性のお尻をひねってもよい無礼講の日としたことがこの名の由来といわれている。しかし次第に「しりひねり」が過剰になり、女性たちは座布団を腰にくくって通らざるを得なくなり、体にあざができるなどの被害も増えたため、大正頃に途絶えたといわれる。



西国浜街道の碑



太郎八地蔵尊

六甲村の村役場を訪ねて



六甲村の村役場は八幡町1丁目にあった。八幡町1丁目というと、JR 六甲道からバス道を北に歩くと信号で二股に分かれる交差点がある。このあたりが旧六甲小学校(当時は六甲尋常小学校)があった場所で石碑がいくつか残っている。八幡児童館や隣の市営住宅の敷地内には旧六甲小学校の跡地を示す石碑・記念樹がある。交差点から阪急六甲に向かう道は後からできたもので、当時の六甲小学校を斜めに横断して走っている形となる。現在旧六甲小学校の敷地には八幡児童館・市営住宅・マンションが建っている。(六甲小学校の発祥の地は、少し北側にある梅仙寺で八幡小学校として創立)

ほぼ石碑でしか昔を知ることはできないが、唯一名残を今に残す場所がある。神戸雲内教会の門柱である。この門柱は旧六甲村役場の当時のものをそのまま残して使用しているようだ。門柱の石の色とまわりの石垣の上部の石の色や石垣もよく似た色をしている。当時を思い起こさせてくれるものに触れ感慨もひとしおだ。



旧六甲小学校跡の碑



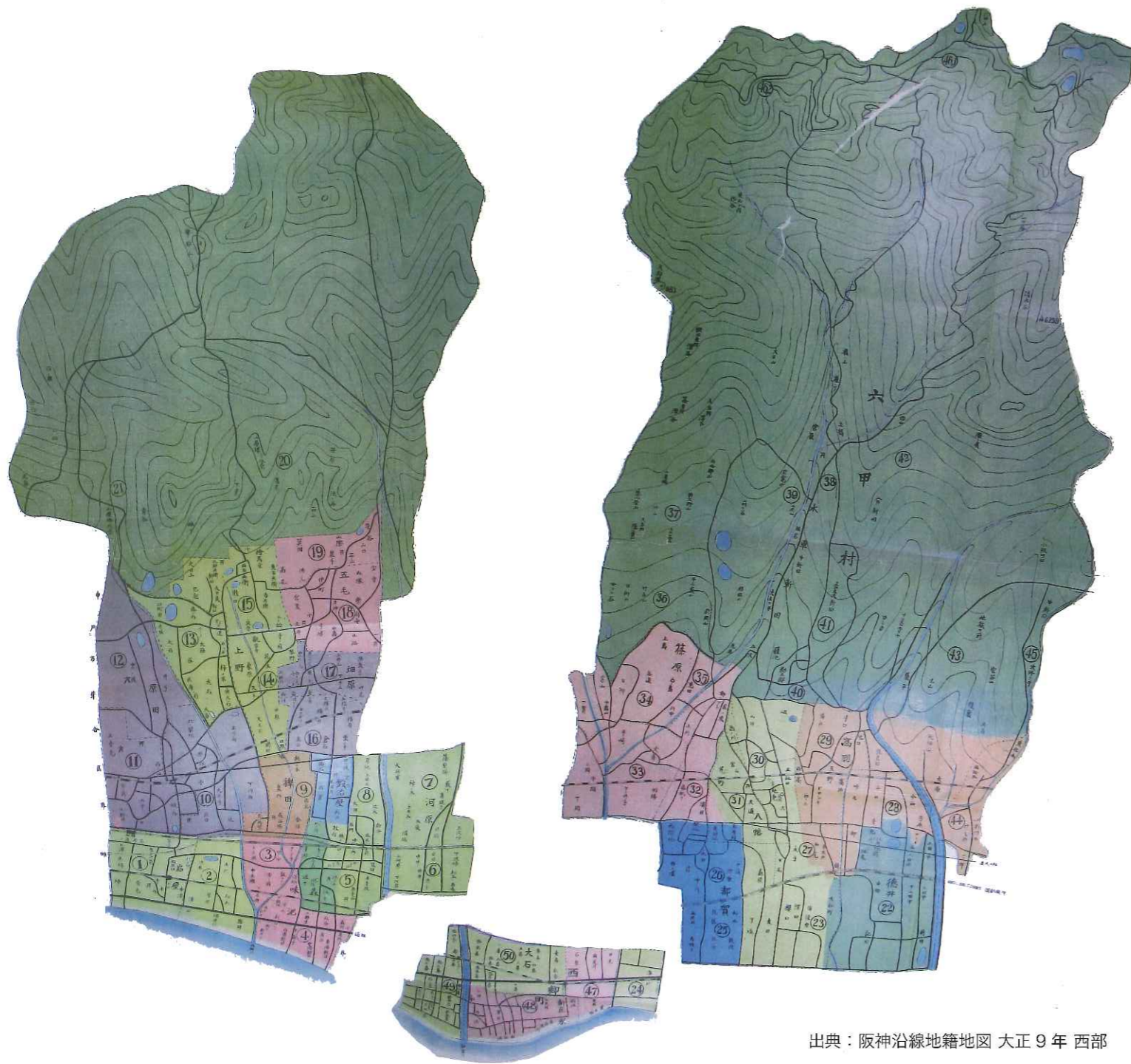
旧六甲村役場跡



編集 灘区民まちづくり会議
 発行 企画運営委員会
 灘区役所 野宮山

灘三ヶ町村合併物語

今から90年ほど前、灘のまちは兵庫郡西郷町、西灘村、六甲村の3つの町と村でした。その後、昭和4年（1929）に3つの町村は神戸市に編入され、昭和6年（1931）に「灘区」になったころのお話です。



出典：阪神沿線地籍地図 大正9年 西部

にしなだむら 西灘村

都賀川以西、北は摩耶山、南は岩屋の浜に囲まれた地区。元々は都賀野村と呼ばれ、河原、五毛、上野、畑原、鍛冶屋、原田、森、味泥、岩屋、稗田の10ヶ村で構成されていた。産業は主に農業で岩屋、味泥では酒造業、漁業も盛ん。合併前の人口は12,640人

にしごうちょう 西郷町

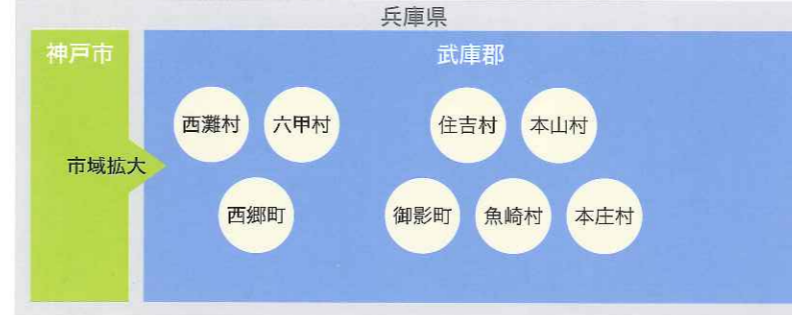
西国街道以南の酒造地区。都賀川を挟んで新在家、大石の2ヶ村で構成されていた。灘五郷の西端にあたり酒造業が中心。江戸時代には廻船（商品の海上輸送機関）の基地があり、西郷の酒が江戸など、全国各地へ送られた。合併前の人口は7,027人

ろっこうむら 六甲村

都賀川以東、北は六甲山、南は西国街道に囲まれた地区。徳井、高羽、八幡、篠原、都賀、水車新田の6ヶ村で構成されていた。産業は主に農業、水車新田では水車を使った精油、製粉、精米も行われた。合併前の人口は5,337人

【図解】灘三ヶ町村神戸市合併の歴史

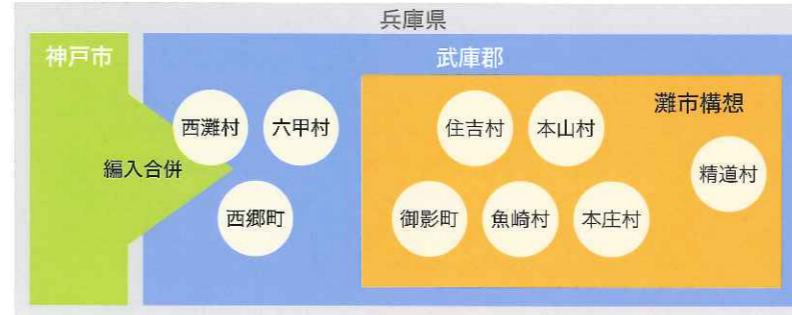
1918



広がる神戸市

1920年ごろの神戸市は大都市の中で人口、面積とも3番目の規模であった。しかし背後に六甲山地があるため市街地の面積が小さい。ではどうすれば市域拡大できるか。神戸市は大正7年（1918）ごろ、神戸市の東に隣接し、田園風景が広がる兵庫県兵庫郡の町村だった西郷町、西灘村、六甲村の編入合併を打診。しかし、この時は神戸市が関係町村になんの相談もなく市域拡大に関する調査を進めたため、西郷町や西灘村が反発、六甲村、御影町、住吉村、魚崎村、本山村、本庄村なども反対した。

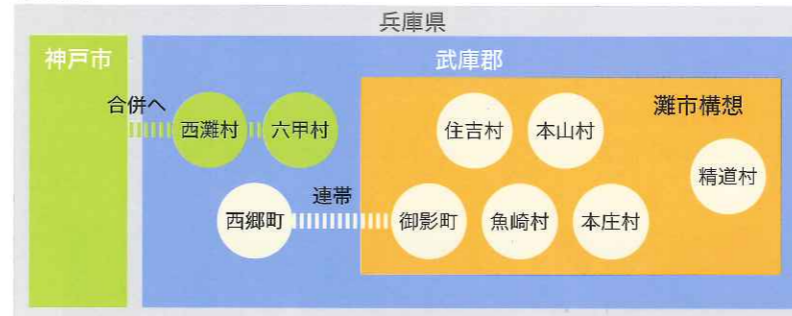
1923



まぼろしの灘市構想

大正12年（1923）神戸市は都市計画区域を決定。このとき神戸市としては、まず西灘村、六甲村、西郷町を編入合併し、将来的には本山村、本庄村、住吉村、魚崎町、御影町の五ヶ町村を合併する考えだった。神戸市は西郷、西灘、六甲の三ヶ町村との合併交渉に再び乗り出す。ところが、兵庫郡精道村（現在の芦屋市）と本山村、本庄村、住吉村、魚崎町、御影町の六ヶ町村は、ともに合併して灘市をつくり酒造業の振興を図ろうという構想を展開。この計画に同じく酒造業が盛んだった西郷町も加わる構想だった。

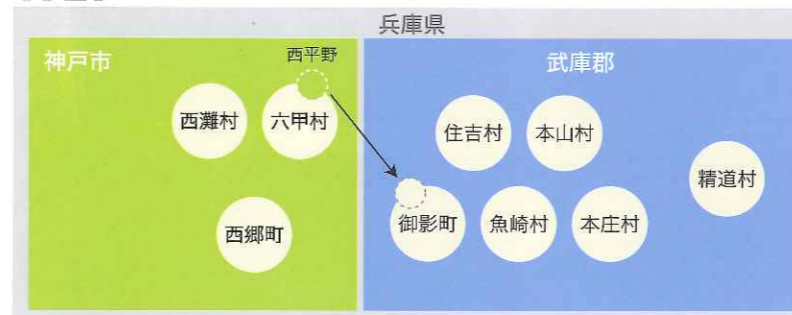
1927



西灘村と六甲村が神戸市合併へ。西郷町は？

西灘村では神戸市合併に関して賛否両論が巻き起こる。大正15年（1926）の村会で神戸市へ合併促進の建議が提出され可決する。比較的財政規模が小さく合併に前向きになっていた六甲村は神戸市からの打診に対し昭和2年（1927）村会は西灘村とほぼ同じような希望条件で合併に関する協定を満場一致で承認。残るは西郷町。酒造業が盛んで財政的に豊かで「灘五郷はいつも一つ」というポリシーがあり、神戸市との合併よりも同じ酒造のまちである御影町と連帯して灘市建設へと傾いていた。

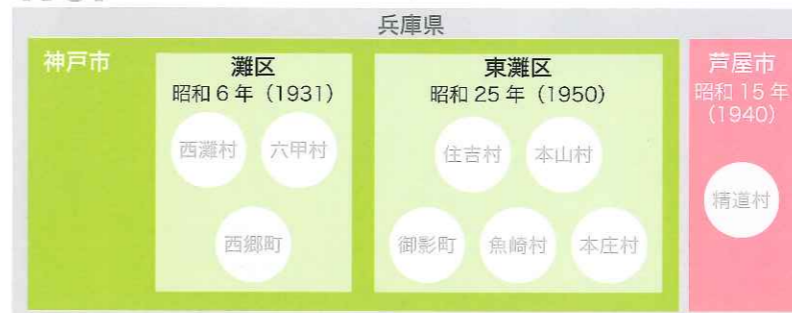
1929



三ヶ町村が神戸市に編入

神戸市はひとまず西郷町を切り離して西灘村と六甲村の二村で合併を実現するよう県に申し入れる。しかし県は「西郷町が飛び地になれば新たな問題が発生しかねない」とこれを保留。編入合併を急ぐ西灘村も西郷町への説得を行った。県は西郷町も同時に合併するよう調停に乗り出し三者会談の結果、細かい点では妥協したものの、大筋では当初の希望が貫かれ、特に酒造業の要望を取り入れた協定案となった。大正7年以来10年の歳月をかけて続けられてきた東部三ヶ町村の編入合併問題はようやく解決、昭和4年（1929）4月1日をもって神戸市に編入された。なお、六甲村のうち石屋川以東の西平野地区については子どもは御影町の学校に通学、日常生活その他も御影町との関わりが深かったため、神戸市への合併よりも御影町との合併を望む声が多く兵庫郡御影町に編入された。

1931



灘区誕生

昭和6年（1931）、神戸市は区制を実施、旧三ヶ町村の区域は住民の希望通り「灘区」となった。灘市構想を画策していた御影町、住吉村、魚崎村、本山村、本庄村の五ヶ町村は戦後の昭和25年（1950）に神戸市と合併、本来灘を名乗るはずであったが、先に誕生した灘区の東であることから「東灘区」となった。もし同時に合併していれば東灘区が灘区、灘区は西灘区になっていたかもしれない。

参考資料 ● 『なだ 灘神戸市編入五十周年記念誌』（灘三ヶ町村神戸市編入50周年記念行事協賛会）・『灘の歴史』（神戸新聞総合出版センター）
『灘のうつりかわり』（灘区勢振興会）